静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）第56号（2006.3）273～284

新潟県中越地震被災地における子どもの心のケア活動
－中越での危機介入コンサルテーション通して－

Mental Care for Children in Niigata Cyuetsu Earthquake

小　林　朋　子
Tomoko KOBAYASHI

（平成17年9月30日受理）

Ⅰ．はじめに

1995年に阪神淡路大震災が起こって以来、災害時における心のケアへの社会的関心が高くなってきている。2004年10月に起きた中越地震はまだ記憶に新しいが、その後、福岡、関東、宮城と日本国内では震度5を超える地震が頻繁に起こっている。災害は、Raphael（1986）によると、「個人や社会の対応能力を超えた不可抗力的なできごとや状況、さらに少なくとも一時的には個人や社会の機能の重大な崩壊状態をもたらすもの」と定義されている。これらは、その原因に基づいて2つに分類されており、地震や火山噴火、洪水などの「自然災害」と、化学物質による中毒事故や放射能事故のように人為的なものによる「人為災害」がある。こうした出来事は、人々の日常生活を根底から覆し、様々な精神的な負担と混乱を引き起こす。Caplan（1964）は、病気、事故、自然災害、戦争といった出来事だけでなく、転居や就職といったものまで含め、「一時的に自分のいつもの問題解決手段では逃れることも解決することもできない重要な問題を伴った危険な状況に直面する個人の心理的不均衡状態」として「危機状態」を定義している。

日本で自然災害による被災体験をもった子どもたちへの支援活動は、1993年の北海道南西沖地震で活動した藤森（1997）の報告から阪神淡路大震災を経て具体的に始まり、まだ10年という歴史しか経っていないのが実情である。しかしニューヨーク同時多発テロでの日本人学校におけるケア活動（小澤,2002）や、大阪教育大学附属池田小学校殺傷事件におけるケア活動（元村・岩切・瀧野・下村・石橋・上本・坂口・天冨・林・高橋・小松・山下・山本・大日方・安福・大河内・藤田・天貝・白井,2002；元村・岩切・瀧野・下村・石橋・上本・坂口・天冨・林・高橋・小松・山下・山本・大日方・安福・藤田,2003）などを含め、危機状態における子どものケアに関する知見は積み重ねられつつある。中でも、被災した子どもたちの心身の変化については藤森(2000)が、1993年の北海道南西沖地震から4年7ヶ月後が経過した段階で調査を行ったところ、中学生（地震発生当時小学生）の6割以上がイライラや緊張を示し、身体的不調を訴える子どもが5割を超えていた。1年7ヶ月後のデータと比較すると、災害から立ち直ろうとする姿勢がみられるものの、「イライラ」「怖い夢を見る」「悲しくて泣いてしまう」といった不安や緊張、社会生活や家庭生活において悩みを抱えている生徒が増加していることを明らかにしている。さらに、1995年の阪神淡路大震災で被災した子どもたちにも9ヵ月後よりも1年9ヶ月後にこれと同様の結果が示され

ていたと報告している。このことからこうしたPTSD（Posttraumatic Stress Disorder：外傷後ストレス反応）をふまえた、震災直後から中期、さらには年単位の長期的な視点で子どもたちへの支援活動が必要であることがわかる。

こうした災害時における心のケアにかかわる支援のあり方について高橋(2004)は、阪神淡路大震災での巡回相談の経験から避難所での活動の仕方を具体的に示している。さらに、震災直後から1年までの間、どのような支援を行うとよいかも具体的に指摘している。机上の議論だけでなく、こうした実際の経験から生まれた知見は災害という危機状態においてどのように動けばよいのかについて大きな羅針盤となるものである。今後の災害、特にほぼ100%の確率で発生するといわれている東海地震において、実際の災害現場から得られた知見や課題を基にXﾃﾞｨに備えた対策を立てていく必要があるだろう。

本学のある静岡県は東海地震の想定震源域付近にあることから、人々がいつ災害による危機状態に陥るかわからないのが現状である。そこで、本研究では、中越地震の被災地における、子ども、保護者や保育者への支援活動の経験から、自然災害による危機状態の際、特に子どもたちに対してどのような援助が必要か、そしてどのような支援体制が求められるかについて考察したいと考えた。

Ⅱ．中越地震における支援活動の実際

2004年10月23日17時56分に新潟県中越地方を震源としたM6.8の地震が発生した。筆者は、2004年10月30日から11月7日まで主に十日町市・小千谷市で、災害ボランティアとして市役所や県保健所の指示の基に活動を行った。地震発生後1週間だったため、中越地域の入り口である越後湯沢から被災地までの交通手段がなく、食料や宿泊場所も自分たちで確保しなくてはいけない状況だった。さらに、余震も頻発しており、いざという時に自分の安全を確保することも必要であった（Fig.1）。本活動は、被災地の支援者の協力により移動手段や宿泊場所を確保することができたため実施することが可能となった。被災地では、臨床心理士の資格を持つ大学教員1名（筆者）が保護者や教師・保育者の相談を受け、さらに共に被災地に入った大学生4名が子どもたちと一緒に遊ぶといった活動を行った。

（1） 活動の概要

被災地に着き、まず十日町市の災害ボランティアセンターでボランティア保険の登録をした。ボランティアセンターでは、ボランティアが登録を済ませたあと、ボランティア個人が提供できる技術と被災者からのニーズをマッチングして支援を求めている被災者にボランティアを派遣するシステムができていた（Fig.2）。しかし、十日町市災害ボランティアセンターでは子どものケアに関するニーズがなかった（あがっていなかった）ことから、十日町市役所の指示を仰いで欲しいとのアドバイスに従い、市役所内健康福祉課の職員に子どものケアに関するボランティア活動をしたい旨を伝えた。子どものケアに関しては、新潟県十日町保健所が中心となって活動しているとのことであったため、市役所を通して保健所に連絡をとってもらった。次に十日町保健所に行き、筆者の現在の所属や立場、可能な支援内容を伝えたところ、新潟県本庁と連絡をとり、どのような形で現場に入ってもらうかについて協議し連絡をくれることになった。その間、一般の災害ボランティアとして小学校や体育館といった避難所での一般的な活動を行った。その後、保健所の指示により、平日は十日町市内で特別保育（家の片付けなど家庭の事情により子どもを一時保育する）を実施することになっている保育所で子どもとの遊びや保護者・保育者の相談を受けた。日曜休日は保育所・幼稚園の特別保育が休みであることや、十日町市に避難解除が出て避難所がなくなっていたため、まだ避難が続いていた小千谷市の市総合体育館に行き、主に子どもたちと遊ぶ活動を

行った。

次にそれぞれの活動についてさらに詳しく述べる。

（2） 避難所（十日町市内小学校・総合体育館）での一般的な災害ボランティア活動

保健所の指示を待っている間、小学校内に設置された避難所の仕事を手伝った。すでにその地域は避難勧告が解除されていたため、主に全国から送られてきた援助物資を移動したり、体育館やガラスが散乱している校内の片付けや清掃を手伝った。清掃作業をしながら小学校の先生方と子どもの様子やどのように確認をしていったかなど話を伺った。その学校では学校の規模がさほど大きくなかったため、担任と養護教諭が中心となって子どもに会っていたようである。次に、総合体育館に移動し、体育館内の清掃などを行った。総合体育館の中にはまだ20名ほどの方が避難しており、その表情は疲れきっており、ほとんどの人が横になったり、眠ったりしていた。中でも、幼児が祖母と一緒に横になり、ずっと無表情で天井を見つめていたのが印象的であった。こうした活動は新潟県内外から集まったボランティアの人たちと一緒に活動した。

（3） 幼稚園・保育所における保護者、保育者への危機介入コンサルテーション

保健所の指示により、まずG保育所に行って活動することになった。

● G保育所

活動内容：保護者のカウンセリング、保育者へのコンサルテーション、子どもたちとの遊び

G保育所では地震発生後、速やかに子どもの家庭での様子を把握していた。そのため、子どもや保護者が登園してくる前に園長先生から家庭での様子が気になったAくんについて情報をもらった。

保育者が心配していたAくんが登園し、男子大学生が主となりAくんと遊んだ。Aくんは興奮することもあったが、心配していたような感情の高ぶりは見られず、笑顔で大学生と遊ぶ様子が見られた。

また、子どもの付き添いで保育所に来ていた祖母が無表情でぼーっとしていたため声をかけ、世間話をしているうちに「力が出ない感じ」と訴えてきた。ポツポツと若い頃に体験した戦争体験を話しつつ、「この地震での体験はまた別の経験だ。あの時もつらかったが、この地震の後もつらい」と話していた。子どもたちが遊んでいる間、ずっと話を伺った。

子どもたちが帰った後、震災後の子どもたちの変化について保育者の話を伺った。「家に入るのを怖がる」、「大人のそばを離れない」、「大人が離れると泣き叫ぶ」、「指しゃぶりをする子が増えた」、「意味もなく叫ぶ」、といった行動が見られ、子どもたちのこうした行動に逆に大人が心配になっており、この体験が心の傷にならないか心配している保護者がいることなどが述べられた。

G保育所の園長先生が近隣の保育所に筆者のボランティアグループが来ていることを連絡してくれ、各保育所のニーズを確認してくれた。その結果、同市内の心身障害児通園施設T園に通所している自閉症のあるBちゃんへの対応に母親が苦慮しているのでアドバイスが欲しいとのことであったため、休日明けにその子が特別保育で通っているT保育所を訪問することになった。

実際に子どもたちに接してみて、大人のそばにいたがる子ども、知らない人が入ってくることに敏感になっている子ども、こちらの急な動きにびくっとなる子どもなど、地震との関連性はどこまであるか不明だが、環境が変わることや、突然の動きに関してとても敏感になっている印象を受けた。ただ、子どもたちがお昼寝をしている最中にあった震度2程度の余震に子どもたちは全く起きなかったことから、余震へ

の慣れが起きているのも感じた。本震での恐怖、特に本震が発生した時に周りに保護者がいなかった場合の恐怖感がその後の子どもの様子に大きく影響するような印象を受けた。

●J保育所（休日保育）
活動内容：休日保育の子どもたちと遊ぶ（0～4歳　10名程度）

この日はG保育所は休日で休みだったため、G保育所の園長先生からの紹介で休日保育を実施していたJ保育所に行った。J保育所では、保護者の仕事の関係や震災の後片付けのために預けられた子どもたちと関わった。しかし、震災直後の休日のせいか預けられる子どもは少なく、3時間程度登園してきた子どもたちと遊ぶ活動を行ったのみだった。また、J保育所の園長先生から地震発生時の様子や、保育所の被害状況について話を伺った。

●T保育所
活動内容：保育者へのコンサルテーション、障害のある子どもとその保護者への関わり、子どもたちとの遊び

心身障害児通園施設T園の園長先生に会ってから、相談依頼のあったT保育所に移動した。すでにBちゃんと母親が登園しており話を伺うと、地震が発生してから母親は子どもの睡眠障害のため十分寝ていない状態が続いているとのことであった。そのため、Bちゃんは母親がそばから離れると激しく泣いてぐずっていたが、Bちゃんには保育者がつき、母親に別室で寝てもらうことにした。また、T保育所に登園していた他の障害のある子どもも緊張が極めて強い状態だったため、腕上げ動作を使った簡単な動作法を行った。

また、保育者からは保育所や保育者自身の子どもの様子から次のような相談を受けた。

・地震が起きてから、子どもが「泣く」、「地震が来ると言って不安がる」、「出勤しようとすると泣いて不安がる」、「突然、奇声をあげる」、「殴ったり蹴ったりすることが多い」、「食べ物を食べない」、「嘔吐する」、「母親が見えるところにいないとパニックになる」、などが見られるためどうしたらいいかというものであった。地震発生後3日目くらいからこうした症状が見られるようになってきたとのことであった。受け止めてあげることが一番であると理解しつつも、正直どのように子どもに対応したらよいか悩んでいるようであった。
・地震で経験した体験を話させたほうがいいのか、そのままにしておく方がいいのか、どのように子どもに対応したらよいか困惑していた。また、震災の様子を映しているテレビの映像を子どもに見せても大丈夫かどうか、といった質問もあった（避難所ではずっとこうした映像が流れているので子どもが不安がったという話もあった）。
・地震によって泣く、不安を訴えることで子どもがPTSDとなり心の傷をずっと背負うのではないかという心配の声もあった。

保育のプロである保育者であってもこうした不安を訴えるのであれば、一般の母親はもっと不安になっていると考えられたことから、保育所などで母親を集めて心のケアチームの医師に来てもらい子どもの状況について話をしたり、対応についてアドバイスしたりするような集会を開催することを提案した。

さらに子どもたちの様子について話を聞いていると、子どもによって地震体験の感じ方は様々で、余震が来てもそれを波乗りのように楽しむ子もいれば、不安になって泣く子もおり、そのとらえ方は子どもによって異なり、こうした要素が今後の子どもの状態に影響を与えると思われた。また、保育者からは地震発生前から日常的に周囲の状況に敏感で繊細だった子どもが、地震発生後、特に不安定になっているとのことであった。また、子どもたちの多くが何か発散できないものがあり、でもうまく表現できないため殴ったり蹴ったりすることが多いのではないかということだった。そのため、ペンやクレヨンを使って思いっきり紙に落書きする活動をやったらどうかとアイディアを提供した。その際、この場では思いっきり自由に自分のやりたいようにやってもいいが、ここから先はちゃんとルールを守らなくてはいけないことをあらかじめ子どもたちに伝えて実施するように伝えた。

また、子ども自らが地震の体験を話し始めたら無理にそこでとめるわけでなく、話をきき、「今は大丈夫だよ」と今のこの状況は安心できるということを子どもに伝えるように話すことをアドバイスした。しかし、余震が続いているこの状況で子どもに「大丈夫」ともなかなか言える気分ではないという保育者からの意見が出たため、地震がなくなるから大丈夫ではなく、あなたの側に必ずいるという安心感を与えるメッセージを子どもに伝えるよう話をした。

この地域にはカウンセラーが配置されているようであったが、まだ混乱していたためどこにいるといった情報が均一に提供されているわけではなく、保育者や保護者がどこに相談していいのかわからず不安を抱えているような状況であった。

（4）避難所（小千谷市総合体育館）での子どもたちへの支援活動
活動内容：子どもたちとの遊び（外遊びや創作活動を中心として）

十日町市と同じように小千谷市ボランティアセンターでもどのようなことができるか伝えたところ、総合体育館での心のケア担当として活動することになった。総合体育館内のキッズルームには多くの子どもがおり、風船を子どもたちにプレゼントするボランティアや一緒に遊ぶ人など多くのボランティアが関わっていた。しかし、3000人近くの人がこの体育館内に避難しているため、キッズルームのわずかなスペースに子どもたちが集まり、非常に狭い環境であった。そのため、走り回る子どもがぶつかりケガをしていた。体育館内のキッズルームでは、絵を描いたり、ボールで遊んだり、遊具で遊んだりした。特に体を使ったり、だっこしたりするといった身体接触が伴う遊びを子どもたちは好んでいた。また、小学校低学年の男児が男子大学生に対して殴る蹴るなどの暴力的な行動、暴力的な言葉遣いで遊びたがり対応に苦慮した。そのため、学生が我慢できないくらい殴ったり蹴ったりしてきた場合には、「こんなふうに叩かれると痛いからやめてね。」ときちんと子どもに伝え、殴らずに関わってきた場合にはだっこしたりして誉めてあげるという対応をとった。

キッズルームに集まる子どもは比較的元気のある子どもたちで、多くの子どもたちが避難所内で家族のそばにおり、寝ていたり、ぼーっとしていた。先日の園児の祖母と同じように、被災の状況などから考えると、無気力になってしまっている状況が伺えた。

キッズルームにいる子どもたちに声をかけて気分転換もかねて体育館の外に出てバトミントンやフリスビーなどで遊んだり、ウノなどをしたりした。途中から大学生と中学生が中心となって、A4版の紙をつないで大きくした紙にメッセージや絵、なんでもOKの落書きをする活動を行った。子どもたちは「がんばろう小千谷！」というメッセージを書いたり、気の赴くままに絵を描いたりしていた（Fig.3）。その後、大

Fig.1 中越地震被災地の様子

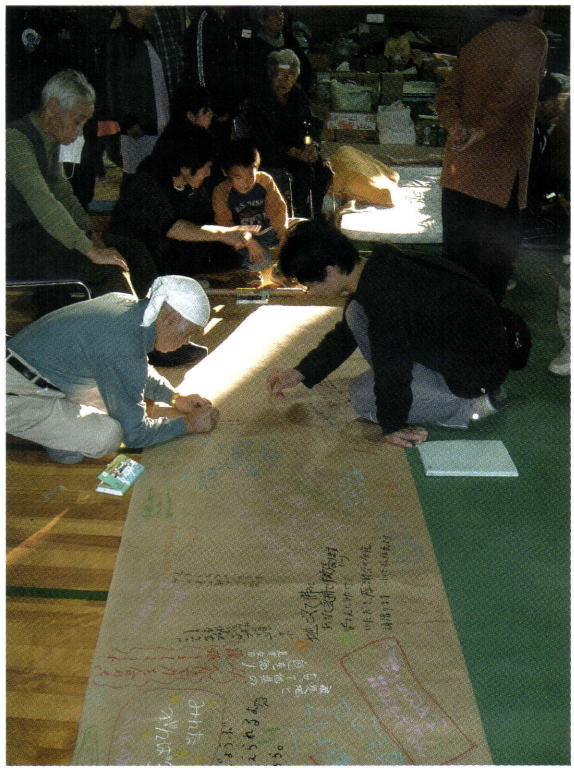

Fig.3 小千谷市総合体育館での創作活動の様子

Fig.2 十日町市災害ボランティアセンターの様子

学生と中学生たちがその紙を持って避難所内を回り、お年寄りをはじめ大人や家族の側でボーっとしている子どもたちにも声をかけてメッセージを書いてもらう活動を行うことにした。中学生たちは最初、照れて声をかけることができなかったが、活動をやっているうちに積極的になっていった。被災者の中には声をかけても書くことを拒否していた人もいたが、子どもたちはそれにめげずにがんばって声をかけていた。結果的に避難所にいた多くの人がメッセージや絵を描いてくれ、用紙いっぱいのメッセージが集まった。総合体育館内への掲示を求めたが難しいということだったため、活動した中学生たちと話し合ったところ、「これを自分たちの中学校が再開したらそこに張りたい」ということだった。せっかく彼らががんばってやりきった活動だったということもあり、学校が再開した際に彼らの学校に飾ってもらうことにした。一連の活動を終えた中学生たちは、「すっごいいいことできた！」とうれしそうに話し、こうした活動ができたことを心から喜んでいた。

この大きな紙にメッセージを書いてもらうという活動は被災地に入る前にアイディアの一つとして考え、紙や色鉛筆といった道具を被災地に持ち込んでいた。しかし、今回、外部から来たボランティアがこの活動を一方的に提供するというのではなく、実際に被災した子どもたちがその活動をボランティアとともに一緒にやったことに大きな意味があったように思う。子どもたちでも、避難しているみんなを励ますことができた、人の役に立ったという体験が彼らの元気を生み出していったこと、被災者として「してもらう」だけでなく、みんなが前に進むために自分が何かを「すること」ができたということがその後の様々な体験を乗り越える時の大きな自信になっていくと考えられた。

Ⅲ. 考察

1. 子どもへの対応について

被災地に入り、様々な子どもの変化について相談があった。余震が続いているときの不眠、泣きわめく、といった子どもの変化にどのように関わればいいのか、保護者、教師・保育者など大人の不安が高かった。また、幼児などうまく自分の不安や気持ちを表現できない子どものストレスをどう発散させるかなど、保護者も含め周囲の大人が子どもの発達段階に応じたケアの方法について必要な知識を身につけていなかったということが被災地に入ってわかった。このことから、心のケアの専門家として被災地に入る者は、こうした子どもの反応について、話を聞く以外の具体的な対応方法を身につけておくことはもちろんのこと（例えば、富永（1999）のストレスマネジメント法など）、周囲の大人がどのように関わったらよいか具体的にアドバイスができるだけの知識を持ち合わせていることが必要であろう。藤森・藤森（1998）や藤森・岡田・西澤・大澤（1998）などが災害時における子どもたちの症状や対応方法についてわかりやすく具体的に示しているが、こうした知識を子どもに関わる大人（特に、教師、保育者、スクールカウンセラーなど）が研修などを通して身につけておく必要がある。岩切・瀧野 (2005) は、災害だけでなく事件事故といったいわゆる学校危機状態において教師が身につけておく知識などをわかりやすく解説している。災害や事件の多発によって、教師を中心として学校危機における対応についての啓発が盛んになされるようになってきているが、まだ興味のある教師は学んでいるレベルにとどまっている状況であり、災害や事件事故はいつどこで発生するかわからないことを考えると教員研修会などの半強制的なレベルでの研修が望まれる。

一方、災害時の子どもへの対応システムを整備しておく必要がある（Fig.4,5）。まず、災害が発生した後、なるべく早い段階で子どもの様子を把握する。

中越では、義務教育レベルでは学校の担任教師が、保育所も担任が中心となって子どもの様子について

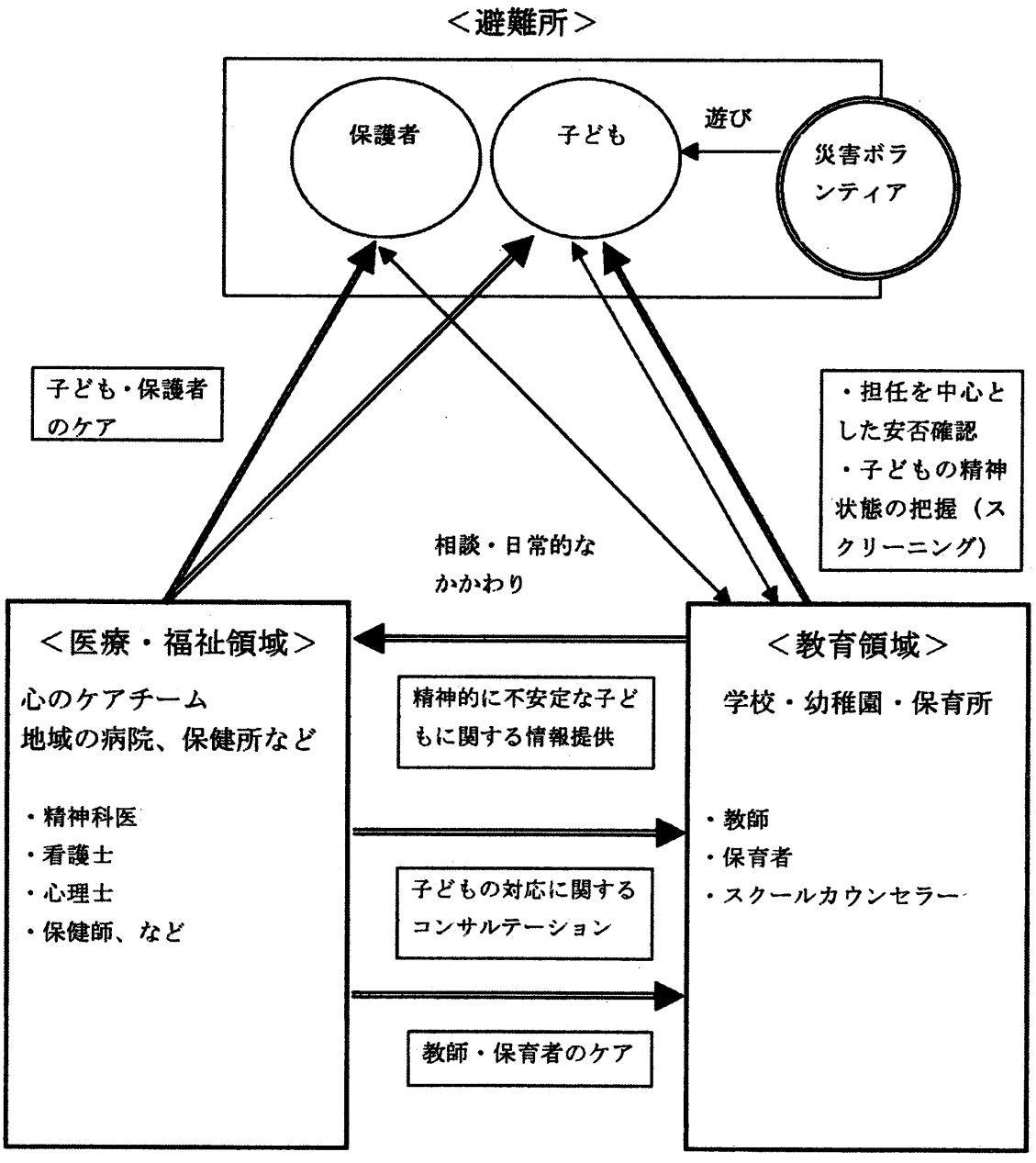

Fig.4 災害発生時から数ヶ月（主として避難所）における子どもの心のケアに関する支援モデル

注：医療・教育の連携に関する流れは二重線の矢印で示した。

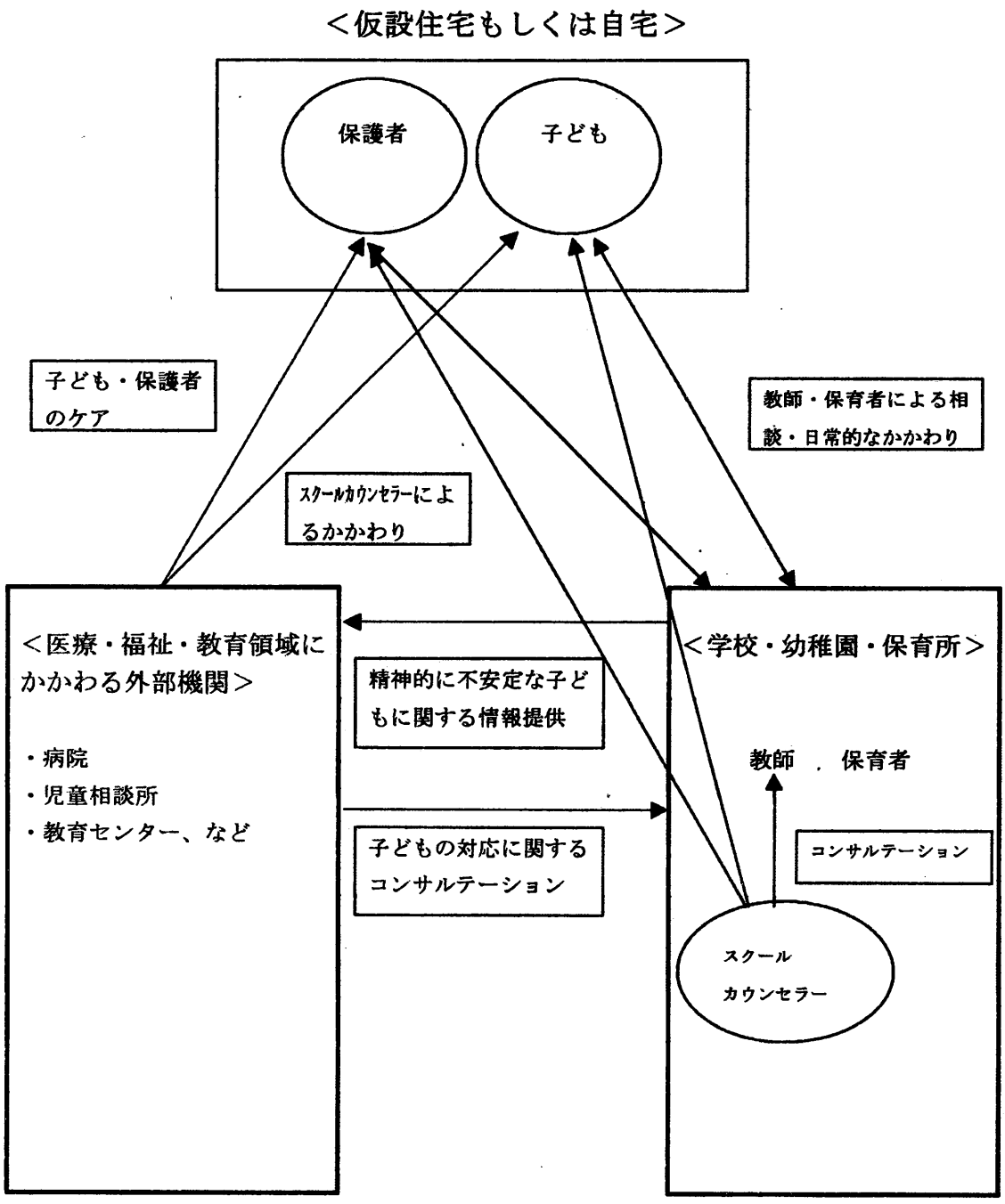

Fig.5 子どもの心のケアに関する中・長期的な支援モデル

(主として仮設住宅および自宅、かつ学校が再開している場合)

確認をしていた。しかし、確認をしたまではいいが、不安定な子どもにどのように対応したらいいか、医療チームといった専門家のアドバイスをどこでもらえばいいのか、専門家チームとの連携をどのように行い子どもを速やかにリファーするかといった、子どもの日常生活の現場（学校や保育所）から医療チームへの橋渡しに関わるシステムが未整備であった印象を受けた。特に、教育現場が、どの程度、医療領域である心のケアチームとの連携が行われたかについて被災地に入っても不明瞭であり、その後の報告でも具体的に明らかになっていない。

東海震災が発生した場合、都市部を直撃することから、学校だけ、医療だけといった一つの場所（機能）だけで被災した子どもやその家族に関わることは難しい。そのため、災害が起こる前の子どもの状態を知っている教師や保育者が早い段階で安否確認と精神的な状態についてのスクリーニングを行い（教育領域）、不安定な子どもについては速やかに心のケアチーム（医療領域）に対応してもらい、日常のケアにおいて教師やスクールカウンセラーが対応する（教育領域）といったシステムを行政の壁を越えたレベルで作っていく必要がある。特に藤森 (2004) が指摘しているように、心理臨床モデルの災害援助は中長期的な援助でその効果を発揮する。短期的なものだけではなく、神戸や中越での中・長期的な支援の中から得られた知見を基に、東海震災に向けてこうした行政の壁を越えたシステムを整備していく必要がある。

また、避難所での子どもの関わりにおいて、大学生を中心とした若者の存在は大きいと思われる。子どもたちと体を使った遊びなどを通して、ストレスを発散させたり、気分転換をさせたりすることもできる。子どもが不安を感じ、夜、頻繁に泣いたりするような状況が続いたり、さらに避難所での生活が続きストレスもたまってくると、大人にも多大なる精神的負担がかかることは簡単に予想できる。子どもを見守る大人の精神的な余裕を持つためにも、避難所で子どものケアに災害ボランティアの若者を積極的に活用するとよいだろう。しかし、そうした活動を意味あるものにするためには、避難所の近くに子どもたちの遊び場（居場所）をきちんと確保することも必要であろう。というのは、本活動の中で、子どもたちと避難所外の安全で、かつ復興作業の邪魔にならない場所で遊んでいたところ、一部の大人から「遊んでるな！」と注意を受けた場面があった。災害時には大人の精神状態も極限であるため、こうしたイライラを、一見にぎやかに楽しそうに遊んでいる子どもたちにぶつけられることも想像に難くない。精神的安定を図るためのこうした子どもたちの遊びを保障するためには、避難所での居場所の確保（これは、「物理的な場所」の確保ではなく「遊びの空間」を指す）が重要であると考える。

2. 保護者および保育者（教師）への支援

子どもたちのケアだけでなく、子どもたちのそばにいる大人のケアも重要である。特に母親の不安に対するケアは最も大切であり、子どもの様子を確認する際に一緒に把握すべきポイントであると思われる。また、保育者や教師からも「自分たちもケアしてもらいたい」という意見が多く聞かれた。保育者や教師はその立場上、自身が被災しながらも立場上、他者をケアする側になってしまう。家族の中に不安定になってしまった人がいたり、自分自身が不安定になりながらも支援活動をしなくてはいけない状況が数多くあったようである。こうした支援する側の精神状態については、阪神淡路大震災後の看護学生の精神状態を調べたところ、29.4% が抑うつ傾向であったことが明らかにされている。その要因として、救援活動への参加、接死体験、死亡喪失体験の存在があることが指摘されている（森村・永野 ,1995)。神戸市教育委員会（1996）は、阪神淡路大震災後、教師のメンタルケアについて触れ、相談場所について案内している。こうしたことからも、子どもを支援する人（教師・保育者）の支援のシステムをどうしていくか、特に大地震発生後 1-2 ヶ月の混乱の中でどのように教師や保育者を支援するかが重要な問題であり、東海地震に備えて早急に議論すべき点であろう。

Ⅳ. まとめ

災害、事件・事故といった学校危機状態が頻発している。特に静岡県は東海地震がいつ起きてもわからない状況にある。そのため災害発生時を想定し、子どもの心のケアについて行政の壁を越えた対応システムを構築していく必要がある。それには、中越で学校現場と医療がどのように連携したのか、どのような問題点があったのか、さらに学校現場に焦点をあて、教師が子どもや保護者に対応していく上でどのような困難があったか、など様々な視点から分析をし、その知見を今後の体制作りに生かしていく必要があるだろう。

引用文献

Caplan,G. 1964 Principles of preventive psychiatry. Basic Books,New York.

藤森和美・藤森立男 1998 災害を体験した子どもたちー危機介入ハンドブックー、練馬区総務部防災課.

藤森和美・岡田幸之・西澤哲・大澤智子 1998 子どもとトラウマ・学校の役割ー災害のあと・子どもたちを援助するためにー、朝日新聞厚生文化事業団.

藤森和美 2004 災害援助の過程と終結、臨床心理学、4,758-762.

藤森立男 2000 自然災害が中学生の精神健康に及ぼす長期的影響，平成11年度文部省科学研究報告書.

岩切昌宏・瀧野揚三 2005 事件・事故のあとー教師が子どもたちに配慮しなければいけないこと、月刊学校教育相談、19(5)、50-54.

神戸市教育委員会 1996 学校震災対応マニュアル作成指針.

元村直靖・岩切昌弘・瀧野揚三・下村陽一・石橋正浩・上本未夏・坂口守男・天冨美禰子・林龍平・高橋登・小松孝司・山下光・山本晃・大日方重利・安福純子・大河内浩人・藤田裕司・天貝由美子・白井利明 2002 大阪教育大学附属池田小学校事件における危機介入と授業再開までの精神的支援活動、大阪教育大学紀要第Ⅲ部門自然科学・応用科学,51(1),55-65.

元村直靖・岩切昌弘・瀧野揚三・下村陽一・石橋正浩・上本未夏・坂口守男・天冨美禰子・林龍平・高橋登・小松孝司・山下光・山本晃・大日方重利・安福純子・藤田裕司 2003 大阪教育大学附属池田小学校事件における精神的支援の一年、大阪教育大学紀要第Ⅲ部門自然科学・応用科学、51(2),137-143.

森村安史・永野修 1995 大震災の及ぼした精神的影響 (1) ー看護学生へのアンケート調査からー、臨床精神医学、24,1549-1556.

小澤康司 2002 ニューヨーク同時多発テロ事件と臨床心理士、臨床心理士報,23,22-27.

Raphael,B. 1986 When Disaster Strikes. How Individuals and Communities with Catastrophe. Basic Book, New York（石丸正訳「災害の襲うときーカタストロフィの精神医学」みすず書房、1989）

高橋 哲 2004 震災から学校危機対応へーこころのケアの深化ー、臨床心理学、4,736-742.

富永良喜 1999 危機介入としてのストレスマネジメント教育、富永良喜・山中寛編 動作とイメージによるストレスマネジメント教育（展開編）、北大路書房.

謝辞

被災地に入り共に支援活動を行った村山大輔さん、土居通孝さん、村上泰大さん、横田裕美さん、また活動を様々な側面から支援してくださった村山明・一枝さん、上野智章さん、小林一成・直美さん、そして被災地で出会った子どもたちや先生方、関係機関の皆様に心より御礼申し上げます。